

朔東から第 126 号 沖合い深く眠る黒いダイヤ（掘り出せ、釧路の海底（ソコ）ヂカラ
（脱稿：H16/3/1）

師団(朔東)管内の至る所を見せて貰い、色々なことを体験させて貰い、この地は小生にとって終生忘れ得ぬ地となった。

朔東管内で体験する事が出来なかったのが、炭鉱の見学であった。実は、小生が着任して間もない平成 14 年 1 月 30 日(因みに小生の着任は、平成 13 年 12 月 3 日)に、国内唯一の炭鉱であった釧路の太平洋炭鉱が閉山された。太平洋炭鉱の閉山による地域経済への影響を考慮して、5 3 社の共同出資により、釧路コールマインが平成 13 年 12 月 27 日に設立され、規模は三分の一ながらも、太平洋炭鉱の事業を引き継ぐ事になり、ヤマの名称を国内最後の坑内掘り炭鉱として「釧路炭鉱」と改め、年間 70 万トンの生産を目指して炭鉱の灯を再点灯する事になった。海外からの研修生を受け入れることで、太平洋炭鉱の世界最先端の採炭技術はアジア産炭国への国際協力と言う形で生かされることとなった。



(入坑前の緊張した面持ち：高橋撮影)

● さて、この釧路炭鉱を見学させて頂く貴重な機会を与えて頂いた。本来であれば、昨日で本鉱区は終了し、次の鉱区の採炭が 5 月頃からということであったが、私共の為に日延べして頂いた。有り難い事に、坑内まで案内して頂き、朔東の地を去るに当たり素晴らしい感動を貰った。以下はその体験記である。意を尽くし得ないが、その一端を知って欲しい。

- ① 入坑準備、下着以外は研修着に着替えて、防塵マスク、CO 自己救命器とヘッドランプを装着し、自己挿検（所謂服装の自己チェック）、指差呼称（ヨイカヨシ）をしてから人車（じんしゃ）で入坑である。後ろ向きに腰掛けての入坑だ。降ること約 1,600 メートル。鉱区は、底から数百メートルの地である。海底下 2 2 0 m 程、切歯面長は 220m。
- ② 坑道は意外に広いのだが、狭い所もある。自然に萎んでくるので拡大工事をしている。蓄熱、自然発火防止の為にコンクリート用なもので覆ってある所もある。坑内所々に CO 及びメタンガスの濃度測定装置や酸素圧縮自己救命装置等が配置されている。安全管理は万全だ。坑内で行き交う人から声を掛けられた。素晴らしい躰が為されている。
- ③ 切刃では、夫々に 50 個のビットを装着した最新鋭のドラムカッターが移動しつつ炭層を切り出していく。見事なものだ。此処の炭層の歩留まりは余り良くなくて 30 乃至 40% であるとの事である。燃料炭である事、歩留まりが余り良くないことのダブルのハンディを克服する為に地形的には機械化に最適であるという利点を生かして、機械化が進展し、現在では世界最新鋭の機械が導入されている。

- ④ 坑内には、色々な用途に使用される各種のパイプが、張り巡らされている。電気の火花が外に逃げないように特別の保護がされており、各種機械を動かす為の電力の変電施設も設置されている。その近くには、海底下 600 メートル沖合い 6 キロの鉱区に通ずる斜坑もあったが現在は閉鎖されている。
- ⑤ 研修を終わると入浴だ。アブラトーレあり、洗眼器あり、炭鉱ならではの。自衛隊駐屯地の浴場を思い出した。炭塵をそれほど感じなかったが。炭塵被害は本炭鉱では起きていない由。
- ⑥ ベトナム、中国、インドネシアからの研修生を 100 名程度受け入れている。2ヶ月と6ヶ月のコースがあるが、何れのコースも研修生のレベルが非常に高いとのことであった。帰国したら一階級昇任もし、自国の発展に寄与しようとの意気込みが強い方が多く、中には炭鉱長の方もおられる由。
- ⑦ 社内は清潔で、塵一つ無く、細かい所まで気を使っておられることを感じた。擦れ違う人も挨拶をされるし、気持ちの良い会社だ。このような社風が無事故を継続しておられる原動力なのだろう。林業や製造業に比しての事故率は非常に低いとのことであり、さもありませんと感じた次第。昔から炭鉱は階級社会なのですよとの説明。ヘルメットの線で階級と職責が一目だったようだ。今では大分簡素化されているけれども。何れにする極限の中では、やはり知識と経験に裏付けられた階級を有する者が統制すべきだ。それが現実だ。
- ⑧ 坑内は殆ど圧迫感がない。寒さもそれ程ではない。涼しい風が吹いている。扇風機で排気しているので、涼しい空気が流れ込んでくる。
- ⑨ 海外研修生の受け入れも 5 ヶ年という期限付きであり、それ以降どうするかは未定であるが、研修成果が高く評価されるだろうし、海外炭との競争も全社的努力等もあって何とか凌げるのではなかろうか。それを期待したいし、祈念する。
- ⑩ 常務執行委員炭鉱長の村上氏と次長の菊地氏に案内して頂いたが、その菊地氏から中島社長の思い入れを寄せて頂いたので、紹介させて頂こう。『弊社の有する世界に冠たる技術は、海外諸国への総合的な技術継承としての新たな使命を託されており、ひいては、日本のエネルギー事情に寄与するものであります。生きた炭鉱（ヤマ）であるからこそ、その技術の信頼性が生まれてくるものです。修練されている技術により新たなエネルギーを生み出すものであります。弊社の設立はまさに国内石炭産業における新たな出発でもあります。決して憂うことはない。チャレンジは夢にビジョンを込めてあくまで高く。夢語らずして未来を築くこと難し。』

● 太平洋炭鉱の歴史

釧路炭田は、石狩炭田に次ぐ道内第二位の大炭田であった。1857年に白糠石炭岬とオソツナイ（釧路市石見ヶ浜）で石炭を掘ったのを嚆矢とする。大正6年、木村久太郎が休山していた「春採」（はるとり）のヤマに着目、炭層、埋蔵量共に良好であったので買収した。

大正9年、木村組釧路炭鉱（春採抗）と三井鉱山釧路炭鉱（別保抗）（べっぼ）が合併し、太平洋炭鉱株式会社がスタートした。釧路港は石炭の積出港として賑わい、南埠頭は太平洋炭鉱、北埠頭は雄別炭鉱の石炭で溢れた。

昭和20年、戦時の強制配置転換から復員した鉱員により春採鉱が再開、別保鉱は翌年

秋に再開。昭和21年、春採抗海底下採掘に着手し、海底下炭鉱への第一歩を踏み出した。戦後の復興期には、年間の産出量は100万トンに、従業員は、最大5000余名を擁するに至った。

石炭鉱業の合理化政策により、最大ピーク産出量250万トンを記録した。然しながら、昭和30年代半ばのエネルギー革命を機に多くの炭鉱が閉山していった中で、世界的技術力を駆使し、昭和60年以降は、海底下600メートル、沖合い6キロの海底炭に挑戦したのである。

昭和44年以降は、年間200万トンを超える出炭量を維持したが、海外炭との価格差等に効しきれず、平成13年11月の九州の池島炭鉱閉山に続き、国内唯一の炭鉱であった太平洋炭鉱は閉山することとなったのである。82年の歴史であった。

惜しむべし。

(各種HP、会社パンフ等)